

平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

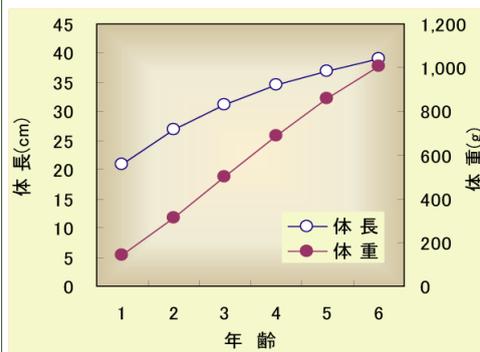
系群名 道北系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 8~9歳
 成熟開始年齢: 1歳の終わり頃(満2歳直前)
 産卵期・産卵場: 9月中旬~11月上旬、利尻・礼文島の沿岸および武蔵堆の最浅部で産卵
 索餌期・索餌場: 稚魚・幼魚期に主としてオホーツク海の表層で生活し、着底後に大部分は日本海へ移動
 食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は、様々な種類の動物を捕食
 捕食者: 不明

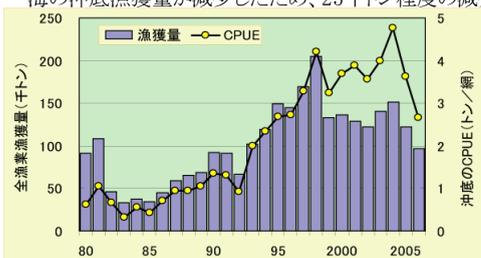


漁業の特徴

ホッケ道北系群は、沖合底びき網(沖底)、刺し網、底建網、まき網などによって漁獲される。漁業種類によって主漁場および漁期は異なる。漁獲量の大半は、日本海およびオホーツク海ともに沖底で占められる。

漁獲の動向

ホッケ道北系群の漁獲量は、1980年代後半以降増加傾向にあり、1998年に20万トンを超えた。その後減少傾向に転じたが、2000~2005年は、12万~15万トンで安定的に推移していた。2006年の漁獲量は、オホーツク海および日本海の沖底漁獲量が減少したため、25千トン程度の減少となり、97千トンであった。



資源評価法

沖底については、90年代半ばに漁獲の主体がスケウダラからホッケへ移行したと考えられるため、沖底のCPUEを用いた資源量推定は困難である。そこで、漁獲量の変化から資源の動向を判断した。なお、漁獲量の変化に加えて、定置網および底建網のCPUE、沖底および定置網における2歳魚以上の体長変化を評価の参考とした。

資源状態

本海域における過去27年間(1980~2006年)の漁獲量の平均値を50とし、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2006年の漁獲量は97千トンで47となったため、資源水準は中位と判断した。また、過去5年間(2002~2006年)の漁獲量は、減少傾向が認められたが、定置網および底建網のCPUEは一定の傾向は認められず、沖底および定置網における2歳魚以上の平均体長および最大体長においても、過去5年間で横ばいであったため、動向は横ばいと判断した。



管理方策

漁獲量の変動が資源動向を反映すると仮定し、過去27年間の漁獲量の平均値から資源水準を判断すると、90年代後半から2004年までの大半が高位水準である。2005年以降は中位水準となったが、その理由として沖底漁業の漁獲量が減少したためと考えられる。過去5年間の定置網および底建網のCPUEの変動や、沖底および定置網漁業の体長変動からは近年の資源量が著しく低下している可能性は低いと考えられるが、沖底漁業の漁獲量の減少が続いていることから、注意深く見守る必要がある。ABClimitは、漁獲量の減少を考慮して、過去5年間の平均漁獲量(Cave5-yr)に0.9を乗じた漁獲量とした。ABCTargetは、0.9Cave5-yrに標準値の0.8を乗じた漁獲量とした。

	2008年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	114千トン	0.9Cave5-yr	—	—
ABCTarget	91千トン	0.8・0.9Cave5-yr	—	—

資源評価のまとめ

- 当該海域における過去27年間(1980~2006年)の漁獲量から資源水準を、過去5年間(2002~2006年)のCPUEの傾向から資源動向を判断した

- 2歳魚以上の平均体長および最大体長の動向も資源動向の判断の参考とした
- 資源は中水準、動向は横ばいと判断されたが、2005年より沖底漁獲量の減少が続いており、注意が必要と考えられる

管理方策のまとめ

- 沖底漁業の漁獲量の減少が続いていることから、注意深く見守る必要がある

資源評価は毎年更新されます。